

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 4日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20720185

研究課題名（和文）明清時代の華南とヴェトナム

研究課題名（英文） South China and Vietnam during Ming and Qing period

研究代表者

山崎 岳 (YAMAZAKI TAKESHI)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：60378883

研究成果の概要（和文）：

明朝と莫朝大越との外交に関わる中越両国の文献を収集し、これを両国国境をまたぐ人々の活動に焦点をあてて読み解くことで、これまでの政府間の外交関係史では注目されていなかった国境地帯の基層社会の実態を明らかにした。特に、現代中国で壮族、ヴェトナムでヌン族やタイ族等に分類されるタイ系の言語を母語とする人々が、歴史的にも両国間関係において重要な役割を果たしてきたことが立証された。

研究成果の概要（英文）：

I have collected the documents concerning the diplomatic relationships between Ming China and Mac Daiviet, and by careful reading of them, focusing on the activities of the local people beyond the state border, I have depicted the actual situations of the basic life and society of those people in the border area. Especially, I have demonstrated how those people who belong in Thai ethnicity, and are contemporarily classified into Zhuang in China, and into Nung or Tay in Vietnam, played an eminent role in the relationships between the two countries.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：東洋史

科研費の分科・細目：東洋史・東南アジア史

キーワード：中国・ヴェトナム・明清・国際関係・華南・莫朝・土官・壮族・タイ系諸民族

1. 研究開始当初の背景

同じくアジア大陸東部を対象とした歴史研究でありながら、中国史と東南アジア史との間には研究の基本的視角・方法等において、

大きな断絶がある。これは利用できる史料の質と量の差違に起因するところでもあるが、東南アジア諸国の中でも中国の文化的・政治的の強い影響のもとにあり、他地域と比べて

相対的に典籍史料が豊富なヴェトナムについても同様である。両国間の歴史的関係について、中国史の研究者の側では中央の政府外交の次元を最重要視して朝貢・冊封などの制度的側面以外に関心が払われることは少なく、ヴェトナム史研究者も国民主義の影響から独立国家としての一国史の枠組みに重きを置き、外部の脅威という視点でのみ中国をみるのが一般的であった。ヴェトナムと中国との境界地帯を陸続きの一つの文化圏とみなす意識は一部の研究者を除いて希薄であった。一方、人類学では国民国家を相対化することは前提となっており、中越国境に居住する人々の民族誌的な叙述も少なからず発表されているが、歴史研究とは題材も関心も異なるため、相互の間に十分な交流があるとはいえなかった。こうしたことから、中国史では政治的・軍事的な脅威であった北方諸民族への関心は一般に高いものの、西南方面の歴史研究は相対的になおざりにされ、ヴェトナム史の側でも、中国との関係について、外交・戦争、「朝貢貿易」などの政府間関係以外の対中国関係についての研究は、これまで十分に行われてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、16～17世紀の中国の華南地方とヴェトナムを一体の地理的空間として捉え直し、その歴史的な変遷と発展を叙述することを目的とする。この地域は通常中国とヴェトナム、あるいは東アジアと東南アジアに分割されると考えられてきた。しかし、両地域は陸続きでもあり、また南シナ海の海上交通を通じて密接な関係を保っていた。また、実際にそこに居住する人々にとって、これらの政権の影響力が彼らの歴史的世界を規定する上で、どれほどの影響力を持ちえたのかは、再検討すべき課題である。そして、そこに展開する政治的・社会的状況は、中央政権から見た場合の辺境という位置づけとは別の角度から、この地を生活の舞台とした人々の活動の歴史として解釈し直すことができるはずである。そのためには、中国とヴェトナムの相互関係の具体的様相を、地方の人々の動静を中心に、平和と緊張の両側面について明らかにしていくことが不可欠である。また、同地域の治安秩序の問題は、現地および中央政府の政策にも一定の影響をおよぼしているため、特に注目していく必要がある。以上の見通しを文献上で実証することによって、並立する国家史及び国家間関係史として語られてきた「中国史」、「ヴェトナム史」及び「東南アジア史」に一定の修正を迫ることを目指す。

3. 研究の方法

研究は主として文献、特に歴史資料に依拠して行う。史料には、史書や地方志等の公的な編纂物に加え、地方官の文集等の私的な刊行物、石刻史料等の非刊行物が含まれる。国内外に所蔵される中国、およびヴェトナムの史書を精査する。また、16世紀以降の海域世界を考える上でポルトガル人の動向は無視できないため、イエズス会宣教師による報告や書簡等も調査の範囲内とする。研究手順を秩序立てる便宜上、まずは対象を海域と陸域を分け、海域については中国側では広東・海南・マカオ等に重点を置き、陸域については中国側では広西、ヴェトナム側では高平や諒山を集中的に調査する。関連文献収集のため、中国・ヴェトナム・ポルトガル等で史料調査を行う。また、研究成果を国際的な水準に高めるため、国際学会で発表し、海外の研究者にも意見を求める。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の三点である。

(1) 明清時代の広西に居住した「土人」とよばれる人々が、宋代の溪洞蛮の系譜に連なりながら、また当時「猺獞」と呼ばれた人々とは属性を異にし、独自の歴史的社會を形成していたことを明らかにした。

中国の広西壮族自治区には壮族に分類されるタイ系の言語を母語とする人々が居住しており、漢族に多数を占める民族とされている。彼らはヴェトナムでヌン族・タイ族に分類されている人々と同様の言語・習慣等を共有し、国境を越えた親族関係を保持している。中国の壮族は異なるアイデンティティをもつ複数の集団を政策的に一つにまとめたものであることが指摘されているが、おおまかに分類すると、歴史的に撞・獞・僮などと表記された群と、土人・狼人と呼ばれた群に二分することができる。前者は農業労働者として明代から清代を通じて貴州方面から広西に移住したとされる一方、後者は宋代の溪洞蛮の流れを汲み、比較的開けた盆地に定住する人々である。「土人」の支配階層である土官は、元代以来中国王朝の官職を世襲し、多くが北方の漢人に由来する系譜意識を持つが、「土人」社会は漢地の府州県と異なり、土官階層を中核とする直接的な武力によって統治されていた。本研究では、広西の「土人」の上述の特性から、彼らが前近代において中国王朝の強い政治的・文化的影響のもとにあり、「猺獞」と呼ばれる独立性の高い集団とは別個の社會を形成していたことを示し、この「土人」社会がヴェトナムとの境界地帯において大きなプレゼンスを保持していた事実を原史料に基づいて明らかにした。

こうした事実は従来の中越関係史や壮族史の枠組みの中では十分に意識されていたとはいえ、「土人」社会の重要性についての指摘は、西南中国史とヴェトナム史との内在的な関連を探る上でも、大きな意義をもつものとする。

(2) 莫氏擡頭期の中越関係文書群について、『明実録』や『越嶠書』をもととして体系的整理を行った。

明朝と黎・莫兩朝との間の中越関係に関する史料は、『明実録』を基本としながら様々な政書・文集等に散在し、体系的な把握が難しい状況にあった。明代中期に編纂された『越嶠書』は、元代の『安南志略』を土台としながら、明朝中国と莫朝初頭までの大越との間で取り交わされた外交文書、および対越問題に関する中国側の上奏文を網羅的、かつ体系的に集めた書物で、当該時期の中越関係史の研究において欠かせない文献である。撰者の李文鳳は広西慶遠府の生まれで、広東や雲南で按察使僉事を歴任した後、官を辞して晩年を著述に費やした。同書は嘉靖庚子(1540)の序が附され、莫氏が明に投降する前後に完成されたものだが、抄本しか伝わらないため、字句の正確性に問題があり、また個々の上奏文も全文が掲載されているわけではない。しかし、李文鳳が独自に収集した情報源に基づく珍しい記事も多く含むほか、個々の上奏文を時系列上に配置するための大きな指針となるものでもある。この『越嶠書』を『明実録』や『蒼梧総督軍門志』等の官撰史料とともに文献整理のための基本資料と措定し、その上で各種文集・政書類に治められた関連する上奏文の位置づけを確認する作業を行うことで、明朝・黎莫兩朝間の中越関係に関する一連の史料群はより整序された形で史家の利用に供せられることになる。具体的に参照すべきは、夏言・嚴嵩・林希元・毛伯温・張岳・翁万達等の文集、『殊域周咨録』『皇明経世文編』『國朝典故』等々の文献である。本研究ではこうした史料群の対照校勘を試行的に行った。こうして分散する史料が相互に体系化されれば、中国史書に不案内なヴェトナム学研究者にとっても、アプローチが容易になることが期待される。この成果は今年度秋に開催される国際ヴェトナム学会議で発表する予定である。

(3) 莫氏擡頭期の中越間の緊張関係の中で、国境周辺に居住する人々がいかなる状況にあったのか、これまで注目されていなかった史料に基づき新たな知見を得た。莫氏政権は、後に政権を奪還した黎朝の影響下で偽王朝とみなされたため、ヴェトナム側の史料が非常に乏しい。一方、中国側では、莫氏の擡頭は国際政治上の問題とされて朝

野の注目を集め、また、折しも官僚や文士の関心が地方・辺境・域外へと向かう傾向が強くなり、地方志や上奏文の出版が激増した時代であったため、ヴェトナム情勢に関する記述は相対的に豊富である。それらの同時代史料から以下の事実が読みとれる。まず、もともと広西とヴェトナム東北部にまたがる中越間の境界地帯は、両国の士官の支配に委ねられており、中央政権による直接的な統制下に置かれていたわけではなかった。また、海上では広東当局も非合法の武装集団による真珠の採取などの活動を、表向きは問題視する一方で実際には半ば黙認していた。朝貢および冊封使節の往来など正規の外交関係以外に、この辺境地帯に形成された自立的な勢力が両国を股にかけて活動していた。これは一面では同地域の政治的な自立性を意味するが、他方では両国の中央政府が朝貢関係以外に相互に直接的な接触を持たないための緩衝地帯を必要としたためでもある。莫朝の成立にともなって両国間の政治的緊張が増大すると、これらの国境地帯にも緊張関係が波及する。ただし、大越と戦争ともなれば最前線を担うことになる広西・広東ではこれに消極的で、むしろ強硬に遠征を主張した欽州知府林希元は福建の出身であった。林の主張の背後には福建船の南方進出に大義名分を与える意図が透けて見えるが、そこには同時に、大越国内にも中国の進出を受け入れる素地があるとの見通しがあった。大越側でも莫氏が擡頭した背景には、増大する民間の政治的・経済的活力が黎朝の求心力を上回るという事情があった。ハノイを逐われて清化地方に亡命政権を立てた黎朝の後裔たちは、明朝による遠征の実現を期待して盛んに外交工作を行うが、最終的に明朝は莫朝を正当な王朝と認め、両国間の緊張は緩和に向かう。同じく福建人の陳全之は、貿易統制の緩和と市場の設置が中国の国威増大への道として、商業の振興をうたうが、大越側では中国への経済的な依存が強まる中で政治的な安定を見いだすことができず、莫氏政権はやがて黎朝を奉ずる勢力にハノイを逐われ中国との国境地帯に逃げ込むことになる。以上に述べたような中長期的な中越両国関係は、国境地帯を股にかけた人々の動静に焦点を当てなければ見えてこない。実際、これまでの日本語による中越関係史の研究は、これまでは政府間関係の叙述にとどまっており、上述のような社会状況への目配りは欠けていたと言わざるを得ない。この知見については、今年度中に日本語で査読付き学術誌に発表する予定である。また、近くベルギーとシンガポールでそれぞれ行われる学会でもその一端を英語で報告する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

山崎岳、同化と異化—明代広西の「猺獞」と土官岑氏一族、史林、査読有、94-1、2011、pp.38-75

[学会発表] (計 4 件)

① YAMAZAKI Takeshi、Trade and Conflicts between China and Vietnam in the Sixteenth Century、international workshop, Tribute, Trade, and Smuggling、2011/11/26、Ghent University, Ghent, Belgium

② 山崎岳、嶺南和越南：試探十六世紀明越跨國交通情形、學術講演 (招待講演)、2011/11/1、清華大学 (台湾)

③ Takeshi YAMAZAKI、The Reconquest onto the South?: The Controversy concerning the Conquest of Annam in Jiajing Era, Mid-Ming、AAS Annual Conference、2011/4/3、Hawaii Convention Center, Honolulu, HI, U.S.A.

④ 山崎岳、明代中期の民族と宗族—田州岑氏と広西土司社会、史学研究会、2010/4/17、京都大学文学部第三講義室

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 岳 (YAMAZAKI Takeshi)

研究者番号 : 60378883